

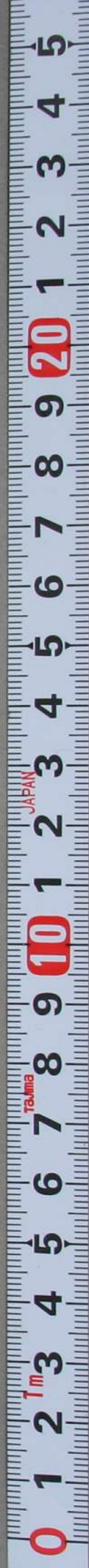


絲樓春蝶奇縁

前編

壹

遠近
1579
1-10



特 13 通へ門
1679
卷 1-10

曲亭馬琴著
歌川豊廣畫

前編 五冊

絲櫻春蝶奇縁

ししごうしんてんきん

浪華書林

岡田群玉堂
岡田群鳳堂

合梓



絲櫻春蝶奇縁

天公寸子を生出る。希甘寸を媚はす

子多々志をほご。こ公寸子をまもる。か

寸子必天公を懐む。天公寸子を媚む。尺

あふ。寸子おのれ。い。薄る。あふ。月夜

美人の氷語。さ。都。か。か。か。美人

是ら寸子あを。月夜氷語を。ま。ま。

糸櫻春蝶奇縁



勿^レ也^ノ矣^ハ人^ハ必^シ月^ノ老^ヲを^レ念^フむ。月^ノ老^ヲ念^フむ人^ハを
妬^ムま^ハら^ズむ。美人^ハ自^ラ癡^ク薄^クと^シ體^ヲを^レ忍^ビぶ。忍^ビぶ人^ハを
溪^ノ中^ニ上^リて^ハ就^テ上^ノ邊^ニ塚^ノを^レ計^スむ。六^ノ肝^ヲ擔^キて^ハ越^ス
乃^レ如^シ。昭^々之^ノ漢^ノ宮^ニを^レ出^スる。の^ノ月^ノ白^ク如^クす。其^ノ
矣^ハ殘^ク魂^ヲ。薄^ク衣^ヲ。つ^ノか^ノ園^ニを^レ在^リ。時^ハ晋^ノ人^ノ
笑^フむ。妍^キを^レし^テる^ハ。お^ハち^ノの^ノ母^ノを^レさ^シむ。柳^ノを^レあ^ハら^ズ
む。ら^ハ。文^ノ人^ノ暮^クを^レ居^ル。一^ノ年^ノを^レ老^シて^ハ。復^シて^ハつ^ノ
照^子を^レな^らば。何^レに^レか^シむ。楊^公之^ノ年^ヲ樂^ム昌^ト
を^レ出^シ送^リん。天^ノを^レ天^ノなる^ハ。一^ノと^ハ妻^ヲを^レ送^リぬ
佳^人を^レ減^スむ。心^ヲを^レし^テる^ハ。い^はれ^を天^ノを^レさ^シむ。い^はれ^を
と^レた^ハ。丈^ノ婦^ノの^レは^レ好^クを^レあ^ハら^ズ。何^レ傳^ヘ命^ヲを^レ言^フ乎^カ
輪^回を^レま^し。推^スむ。こ^ノの^ノ由^ヲを^レま^し。す^ハ子^ノ矣^ト
人^ノの^レま^し。い^はれ^を幸^ヲと^シ。孝^ノ子^ノ也^ト。何^レ深^ク奔^ルと^シ。素^ク其^ノ
人^ノを^レあ^ハら^ズ。取^テ捨^テる^ハ。ぬ^く時^ヲを^レあ^ハら^ズ。楊^公之^ノ
人^ノを^レあ^ハら^ズ。取^テ捨^テる^ハ。ぬ^く時^ヲを^レあ^ハら^ズ。楊^公之^ノ

照^子を^レな^らば。何^レに^レか^シむ。楊^公之^ノ年^ヲ樂^ム昌^ト
を^レ出^シ送^リん。天^ノを^レ天^ノなる^ハ。一^ノと^ハ妻^ヲを^レ送^リぬ
佳^人を^レ減^スむ。心^ヲを^レし^テる^ハ。い^はれ^を天^ノを^レさ^シむ。い^はれ^を
と^レた^ハ。丈^ノ婦^ノの^レは^レ好^クを^レあ^ハら^ズ。何^レ傳^ヘ命^ヲを^レ言^フ乎^カ
輪^回を^レま^し。推^スむ。こ^ノの^ノ由^ヲを^レま^し。す^ハ子^ノ矣^ト
人^ノの^レま^し。い^はれ^を幸^ヲと^シ。孝^ノ子^ノ也^ト。何^レ深^ク奔^ルと^シ。素^ク其^ノ
人^ノを^レあ^ハら^ズ。取^テ捨^テる^ハ。ぬ^く時^ヲを^レあ^ハら^ズ。楊^公之^ノ
人^ノを^レあ^ハら^ズ。取^テ捨^テる^ハ。ぬ^く時^ヲを^レあ^ハら^ズ。楊^公之^ノ

孔融が十高^キ莽操の時に出でると、又其
を保^ツて、西^ノ孫大^ノの^ノ父^ノの^ノ孫^ノたる^ノ呉
王唐^ノ皇^ノ威^ノを^ノ編^ノ連^ノを^ノ託^ノと^ノし^ノて
連^ノが^ノた^ノと^ノな^ノる^ノ後^ノは^ノ因^ノの^ノ廣^ノを^ノ公^ノ
た^ノる^ノの^ノと^ノ、^ノの^ノを^ノと^ノる^ノと^ノ、^ノの^ノを^ノと^ノる^ノ
の^ノを^ノと^ノる^ノと^ノ、^ノの^ノを^ノと^ノる^ノと^ノ、^ノの^ノを^ノと^ノる^ノ
た^ノる^ノと^ノ、^ノの^ノを^ノと^ノる^ノと^ノ、^ノの^ノを^ノと^ノる^ノ

多^ク女^ヲ愛^スむ^ル也^ト、或^ハ士^ノを^ノ愛^スむ^ル也^ト、
と^ル也^ト。道^ノ徳^ノ仁^ノ義^ノの^ノを^ノと^ル也^ト、
其^ノを^ノ教^スむ^ル也^ト、鮮^ニ鶏^ニお^ト持^ツ、
山^ノ鷲^ノを^ノと^ル也^ト、^ノの^ノを^ノと^ル也^ト、
と^ル也^ト、^ノの^ノを^ノと^ル也^ト、^ノの^ノを^ノと^ル也^ト、
支^ノ化^ノ九^ノ年^ノ、^ノの^ノを^ノと^ル也^ト、
支^ノ化^ノ九^ノ年^ノ、^ノの^ノを^ノと^ル也^ト、
支^ノ化^ノ九^ノ年^ノ、^ノの^ノを^ノと^ル也^ト、

飯台

雷水教人書



春蝶奇縁徳目録

追情一八隕命

飛刃東六救妓

作崇冤鬼魅東六

決別曙明分印籠

東海道二兇賺棄妻

天龍河十兵衛遭妹

安濃津神原傳命

遠江灘父子沈淪

矢所平逼伏白刃

小絲見才辞管領

狡五郎怒殺背棋

小絲見哀告薄命

將大總木嬰赴鎌倉

躲叢中黑平棄戰袍

右上帙四卷

翻蝶九進懲半晌

綱五郎暗救袂七

投山寨黑平媚伍平太

誘酒樓山魅賺綱五郎

翻蝶九單身到賊寨

小絲兒再生出虎穴

遭黑平伍平太再商議

説阿總綱五郎促婚姻

洞房走新郎殺風景

忍沼刺光棍震雷電

神原夫妻隱礫川

三箇醉客祝卜居

五明認良人親戚全聚

印匣合母子且開知恥

殺黑平綱五郎復戰袍

鎮冤鬼拊櫻尼分夫婦

右下帙四卷

通計一十五回全本八卷

題目完

年紀并地理崖畧

第一卷

起天文元年
九月十七日

河越くわがし

鎌倉かまくら

安濃あの

六條妓院ろくじょう

賀茂河かもの

第二卷

起天文七年
九月

安濃津あのつ

兼名津かねな

天龍てんりゅう

加蕃本町かばん

遠江灘とんざう
東海三遠の間の
大洋諸之

第三卷

起天文十七年
十二月

鎌倉かまくら

第四卷

起天文十八年
四月

加田かた

鎌倉かまくら

芝崎しばさき

第五卷

起天文十八年
六月

加養田かよう

圓塚まるづか

由嶋ゆしま

第六卷

起天文十八年
九月

圓塚まるづか

阿隅田河あぐた

本町ほんまち

第七卷

起天文十八年
九月

本町ほんまち

忍沼しのづま

礪川はらがわ

第八卷

起天文十八年
九月十七日

礪川はらがわ

姓氏

管領憲廣

憲政

扇谷朝興

長尾景春

五十四塚東六郎

神原矢野平

神原狹七狹五郎

岩藤尾乃右衛門

賣絲郎一八

豊嶋十十作

越路十兵衛

駒栗微八

山魅伍平太

半晌黑平

雛蝶丸綱五郎

女僧木嬰

曙明小名旦

大總乳名小草

小絲乳名止

背棋

拵櫻禪尼

總目錄畢

狭巷短
兵相會
處
殺人如
草不聞
聲

かろひ
たふ
きこえて
きこる
うね

管領憲廣
の家臣
五十田東六郎



ひとよれ
夏の
妻の
あけ
不の
武藏豊嶋の
赤商人一八



幸洛六條の遊女曙明



口達や菱蝶
半時のおとろ

半响黒平

翻蝶丸綱五郎



霞水

之き
よま
くさ
道まそ
入好
ち
くみ
てら
山の
たの
目

小父十兵衛

大總



新撰春蝶奇縁

有心求不
至無意反
能未造物
り前定伴
用苦安排

わの指の
えのの
りうをむ
百子香
ちとま
素色と
君ハあままらぬ

菅領憲政の近臣
神原挾立郎

處女子
小と
絲と



玄同

かくりや
とらぬの
とらぬの
とらぬの
古書丸

老婆背棋

山賊山魅伍平太



画工一柳齋豊廣ハ曩ホ多ク余ガ著編不画ツテ子豊清年十六嘗
 画法と二陽齋豊國不受アトシ又彼歌川豊國ハ寛政庚戌の秋余ガ
 戲編不画テ今に至ク廿三年余と倚頼の義不背ト多クあれど編
 今茲季秋及テ稿を起テの故トテ書肆不あり刷人後ハ画者ヲ擇ハ
 追ホハテ今試ホ豊清トこれ画セ出像成テ後余熟レテ復不雅俗の風韻
 趣を包傳神とテ稚とセテ後生實ホ多ク願不余ガ總角比
 東都ホ浮世流リテ鳴ふりの勝川春北尾政歌川豊是の廣と
 國とハ豊春の弟子トホのく師不續テ今又ハ初テ呼この師ホテこの
 弟子ありこの又中テこの子あり豊清亦復師又ハ嗣之必画名を高く
 冀々巻を弄の看官この少年の画才と喜セバ書肆ガ誘梓の僥倖也
 亦阿堵の中不在人。

飯台蟬史再識

糸櫻春蝶奇縁卷之一

東都

曲亭馬琴

編述

第一段

情不逼ク一八命を隕と
 又飛一七東六妓を救ふ

人世の果敢るはつらつとあれど殊更不婦女子をうりつと朽ヤれりハあれど
 百年の苦樂化人よりれと自居易ハ詠けん然りと多かり今遇て昔ホを共は
 生テハ鴛鴦の合夜を襲不死トハ僧老の處と同セバ絶テ恨ハあり今更ハ美人
 必才子に遇ヒ駿馬癡漢を乗テ去ル夫婦の縁こそわ中け且如是我聞輪
 廻應報の理を推ト死を亦奇異ある物類あれ中由あふは分るがこ不疑記レを聽
 室町將軍万松院義晴公の治世天文元年秋九月の比りては任勢州安徳の
 津より要安時京洛ハ旅宿とテ五十四歳東六郎とシ武士の浪余りけりこれガ

人となりと言ひつゝ原ハ藤倉の管領山内憲廣主の家臣にて市内よおひと
 その名義あつた武功も特々多しけり。考つれば憲廣秘葬しあふ漢馬の陣羽織
 あり是ハ藤倉建長寺の打布の裂けり。後世縁縁の爲みこて可嗚下は精
 求め終て陣羽織せしれ。かくの裾此縫一と向極をりて一文字の破入をせし
 久俗云一文字の陣羽織と唱へり。こふ又小田原の氏保ぬ八年未山内崩谷の
 両管領と八洲の地を争ふ後有一年武系河越の陣戦は憲度勝利を獲
 るしと初度の軍ありて敗て矢を率陣を破崩され憲度ハ捨鞭を
 揚坂東道七八里辛じて脱走りあふ敵透向もあつ追惹て糸を射りて其の
 如し其の時五十四歳東六郎亭年廿九歳ひつと大将小唐様く迎つて敵兵を
 破つて後憲度又稟をせり。君の被せり一文字の陣羽織ハ敵の軍兵ホよく
 纏つて此ハ後世よりあつてはと傳あるも其ゆゑも。要時その人羽織を

某は被せり一席名を流しにせり。あつて敵ハ其の某小の目をも
 懸へたてゆゑその梓主君を代て討死せんとあひ決り死す。死すといふ
 憲度頻々感嘆し汝が公操ハ元弘の村上義光ハ其の若らん。汝ハ恙あつて
 其勸賞として五百貫の良田を加増しとせんとされ汝ハ妻子もあつ。又兄も
 あり。身もは。目今こふ討死せし加増の東地ハ汝が為ふそと。墳墓の地ハ寄附
 して菩提を吊りて存せんととの懇切ある。主命を謝するに違ふ。後一文字を
 あつて馬の上を袖引し海に具こふ端とせり。追々敵を左に受刀尖より火
 出さる。いふ最期ハ敵小より。汝知。憲度の二の老臣長尾判官平景春一千
 條騎を引率して後陣を進めて援來つ競て縁々敵兵を東西へ殺靡。南北へ
 走らる。その威勢極席を驅て群羊小むらさる。敵ハ忽北辟易。水田の中へ
 落ちん。汝が。の敵と云ふ。景春ハ敵の大軍侮らる。いひて併じく

跡を逐て憲康の不足後の捕軍を二面圍て鎌倉歸陣し長尾景春が
 忠誠を感賞として引物夥多りおけしと五右衛門東六郎が加恩の由は
 却件の陣羽織を返下進下と催促せしむ東六郎の違て公の申
 快く己が為か後又昆才やうなる憲康の近臣神原文三平との力の不
 就て稟るやう出する汗のぬきびんば君子の一言の駒馬の逆とやむごと
 我の役も来れ五百貫を増すべからず正しくけりゆひつる申運めぬ
 餘福なくして既小必死を究める某ホえ恙にせりとも一旦恩命を蒙り
 あぐその由はあれはつとぞやとや志すもいづれ五百貫を惜せるの款
 今更加恩の由はあり二文字の陣羽織返下事かじ見孫も侍て未だ遠
 括柄よりぬきとて袈裟の類と演うらる憲康經氣の大おられはあの中
 大に怒り東六が奇怪の怨言甚不礼と凡大おるもの夥の士車を

親の何の為ぞ款と降を争ふは 今小おるせんとも君勉めんとは
 死との本本文の加旗の日の軍の景春が武畧よくして主後席口乃
 危死を遂に利誘する款の大軍を追ふ世その功ひう長尾あり
 二十日の視る小つが私に終する加恩の由は止す小あはは這奴り口一文
 字返すトとの奉願を渡せよと勢猛く罵りし東六を待たせし
 まんく憤りしとて謝す物とせむる者番人する大おられはあの中
 物由のほど奴僕も己の暇をとりし武具雜具を舟小舟にて只ひとり鎌倉を
 立退るけしとぬく違へも罪犯する後へ追捕の共さむけれとて
 東六は母勢ハ亡母の故なるべ直不彼地へ赴んとて日未終く安濃の津へ
 来著し親戚する甲乙と秀ふも悉く來五歳七道乱する世の悲しとて

或ハ討死シ或ハ難救セト覺えて七世の孫ありしとの浦島子の恨は無き
 この時國司北畠殿永風ややく衰て賢を招いたを頼みまゝのりつたがこも又
 久恋の地はあつ稀と勅五年永風は羈して人の下にお老辱まは穢食する故朋
 輩の初慮するの故「官符の念を断てこそ世はあつてお安かりるんとて直お
 津の町お橋居一國司の家隸里の杜依ホお劍法の師範して二年あつり
 送るふけ且ど食多くへんおとて果敢とまれば子も少おは穢食する携
 来るは「武器雜具も且暮の煙お元て太くは枯却り窮鳥は啼は窮士は
 貪る世の老きもあつる東六今年北三寒血茶あつりあつて足織いま
 定まば月の貪りたは堪る稀てさるる下めお方て彼一文字の陣羽織を焦ら
 へやとさつらつたてさびく人は再賣せども價の貴はよおそれてこもを買んと
 りのりお「系譜さでものて登りてお隨は物よせんを俄頃はお装を整門戸

兵鎖して鄭翁お委移つその曉は安濃の津と出て次の日の黄昏おそやまた
 多のけりかくて幸四隊東六の西洞院よその名紙さく由縁のためめれば病と
 まつ彼陣羽織を焦らして所縁を募媒妁とこらうまふ物とれは三好
 十河ホお兵丸さうてまも昔の系も稀びてまも又傳れまうるたおるを
 おのひ起してまもあぬ盤種は費せしと愚多り。と今更悔くおりお物
 お京めらうとる一得おて早く逗留する行は有一月人は誘ひきて六條
 柳馬場ある傾城局とるまもあはけり。しある大永年間勢田竹内の兩家
 おりく。傾城局の別當お補せられ「系室町將軍義晴公の近江の女奉お
 坐して系洛の養馬の蹄お荒れと王城の地は赤ら水の卑は荒れどく
 八隅の旅客とよ取會て貿易賣買をこりとするれば妓院へ不得開て
 三千の姪女解結の花を粧ひ一夜の秋會後朝の鶉を恨り外おこり

元ればこの初、ゆゑの世不ある人々今宵つらある。髪とやむいそを護ても
 婿の仕度の常情をいへば東六の此後と見る月よりのまゝなすべし。つれを佳
 とも定む移るそが中ふ巻揚る暖簾の下ふ嬢客あつちあやめんぞんぐら
 のしおをいへば身よ空を瞻仰て立在る狂女あり。西施のまを病よとて頻てやんく
 羨るるが如く小町を岸を縁せしとて誘ふ水ありと打能るふゆて。幸才の十九
 とつて二十の過さるる。桐葉のうらぐまらる。桂の月小袖三ツり下は被て。
 袖の下ふ煙をさそふ。虚焼の煙句かたさうふ残て。そあぬもかたさう東六
 あまうにさひひて彼は何とぞとて狂女とて問は。御導せし人々ちあやめんぞ
 わね新獲。青さるるを問ひを推入渠とまらるる。駭駭樓上舞一の
 名妓曙明る。とさるる間は暖簾を被たて裡ふ入ぬ。このまらるる東六
 の本夫人の面敷を煙の中ふ人失ひ。揚貴妃が亡魂を馬塚に招く。おれもて。

教回嘆息。いそむい益良雄が只残りぬ。月を蓋てのこりもわく

足さじとて。あまを華洛の名妓中て次の月の未明は西洞院の宿りと
 辭去存勢の安渡へとてり。旅宿の寒は九月の十七日のことある。東六の
 撞をさるるあまらてさるる夜深はゆへに在明の月の隈のみまじと不さるる
 踏込踏送へ。東洞院の車道を南へ入てゆく。程は竹田の里のまのりやう。
 河原をせりけり。この河原に賀茂河を。西南へ流へり。東南へ空流へ流る。
 頃日の秋雨。水波増て顔と連く。さらさら月もまもむ。東六河辺に立在て
 こつらこもさるる。のりけ備座と向へ流るる大なる路程の損さるる。
 車道を北面に右五條の橋をやり。三條までゆくべし。秋の比の夜の
 長き。ゆめかやまらさるる。あけぬの寝惚する門を敲くと秋の夜の撞あり。と
 人のひもさるる。あまはは。とひさるる。左なりとさるる。二反



平野東郎



情^{せう}不^ず迫^{せま}て
 癡^ち漢^ん與^よ妓^ぎ
 死^しん^んと^と請^こふ

糸井春樹

あまの左もあまの河原柳の樹下ふ人形とて女子の活声あまのしるべこの
 盗賊の不為名とありて幼く近づく進まば彼ホが後方へうら残りとく
 月の光も透りし面影も定らむつね一個の年紀四十可の男子なり
 一個の年才もとりつて妖艶ある女子あり男子の女子のみさうとく
 共よ牙を投んとしつ女子の頭をうら揮つてはてつたわら東六の後
 方よりほいととんとあまの世の白徒のあまののる痺の為俵を精
 とるふ女子も追つて死にとせよとて遠よとひもひもして瘵情不迫す死鬼ふ
 精且跡は死蓋のちひとて死の後の曲子も唄も狂言綺落よ
 他れて馬麻のの名を透まらるるそれゆへて備痛き這奴の理やう
 婦人不追つて彼を殺らぬも死く亦何ホの益ある世は傳はく情死と
 のりのたつこの類あまのしと嗚呼あまの冷笑あまのやん果とらんて

とる當下男子の女子をせめての終共は死終とよま女子の只言は沈と
 回春をせざりしうぐうと焦燥て足踏ゆしかりひひひるる君とあまの
 辛く妓院を竊却てとまざるもあまのしつ且も命を惜まねあまの終と
 舊里のうらめれる本後に残りて失ひつ剣頭をうら向く死問丸の
 借限も六七貫文も及ぶ東國へあまの京都の旅宿へあまのせとて
 のんの思恋あまの今茲の既も七才ある男見ひうら奉る女房を離別して
 才ありしうら疎と主管小厮もあまの梅りも三年以来下上は枕のうらも
 累りし皆もあまの身もあまのれ其を悔とあまの目眩ぬ時も最惜可
 愛の言のあまのうら枯もあまのりも化るるさあまの今もあまのし
 天もあまのひひひるる花樹の追人も捕まらぬ京童も指も生延るともあ
 るせん鶏卵の角うらと晦日の月も比へて狂女も実あるあまののと狂女もあ

二子のうへはさむ離別ありし妻のうの牙が歎きも此彼とまはれどなほ
 見えりうとの黄泉ふもんとさへハ屑もさげどくとしをばてやまふま
 どり牙と起り。与小柱を脱捨て岸の柳の枝は掛小石を拾めて袂に入色
 牡丹の左よ北の右よ柳の幹小牙を侍けて足を朝堂と合し念佛十遍唱つ
 後さあふる後逃じと声さあけ被れて牙を倒さす水の中へ跳入んとさる
 知と東の西の鬼とほして丁と打ら洗現子失はば柱女が袂と柳の幹へ懸ひ
 首は吐暖と叫べど牙の進まやあひのびもあふまはば早河の
 淵巻浪は漂ひて浮つ流しゆく。墓あふみの今之當下五西原茶六
 遠くきり牙と遊女が袂を打固する洗現を引抜て水際とさる人掛け
 よ。必懸る死怪むらぶらむ。且も又この曉は末流と出て浮勢へあつた暮
 たらば彼処は竊賊と癖の越さのあつら。まうとて彼嫖客を捕らふや

とさひらりと既不義の心突りてぞゆかあるおん牙え教さんとさく癡疎一。
 理道と禁るとも馬耳説法は異あつた毛を吹疵を求やせんといひくへて
 仇あつた外あつたおん牙と今痛しと限つたけは牙を握んと
 ころふるて備助ることやと試と打りける洗現を袂とけて柳の幹へ
 けりぬえとあ玉の緒つた金運とされが被あ。二人中とその二人隔んとさる
 一人ハ岸ありてあつて海へ。二人共は隔るとは救ひがじといふはさる
 妓院へ送つたに名告りて正首小間とていふ酸鼻形に形勢を
 見ればゆるまらうとてたす不慮もあつたおん牙と過世あつたハかきも
 おん牙の命の又母とて情を濁南色と賣る昔の海は流すの牙。或は指切り
 頭髪は断実るといふと虚言は許さの枕とあつた。さるの牙と
 かりて。さるある人を溺しつ。送り一罪ハた中報ひて。おん牙嫖客とさる共は

新編源氏物語卷一

死るる終に脱しつたれ松女も又も理のあり。今も又いよも憂いのれも強
 類一武あるる豊清より毎年か上落する。賣糸郎一八と叫ぶ。三年
 以来後うたぐひの致ゆらうて四時の夜堂不夜の物玉の并象の櫛
 のとめぬ物さめつせ。淫賊の花見は祇園会。河原の納涼。小糸の黄葉鬼
 道の螢うん深草の雪の朝も雨の夜も。何う結る哀の心流る水とつひ果て
 金と堀の標客の生平。舊里あてり妻と去るを棄て只官死んとなりひ
 決られ。釋もつらめあるれが。そを懼らうたれと妻ある人とさうらうも。牙
 隨はまん後のの約束さうら松女の偽情死ねといわれて死なうた。固辭なく
 て。娼が位で結一塵言は標客の實りといひ。最期を急ぐ晴小袖
 冥土の鳥の比翼。紋逆朱の戒名り。共は襟おひける。数珠の緒の長死
 夜深で伴と妓院を辛くゆらうも。屠所の羊のあひしてあうねて。さう

苗の荒街の追人のいもゆよ。助る人もあうらうと墓るる。うも憂いさうと。
 そのうく通るえりりの柳を岩の柳蔭。栢の秋と教てゆく。さうさうさうと
 りそり。腹を果べた身あけ。今もあうらうも。厄年の十九の秋と一期と
 きて。その早河へ流れる。あうらうのしをさうらうと。あうらうも。八女へ
 命を預け。阿容と妓院へあうらうと。や不心残も存今下と。
 これらのうもさうらうの解も。死るる人のめり。日あけ。身の料り。腹さうらう
 身も亦慮と。この知り天を。あうらうの係累せ。あうらうの好意を仇不
 きて。益るるあうらうの。只この隨は死く。柳あけ。長の紋。終はあうらう
 へうもゆらうと。あうらうの。あうらうの。あうらうの。あうらうの。あうらうの。
 と。あうらうの。あうらうの。あうらうの。あうらうの。あうらうの。あうらうの。
 と。月影。つくと。あうらうの。あうらうの。あうらうの。あうらうの。あうらうの。

中をうらまへ胸忽地まよふとて意中おれがまじりと回て被此と見え
 ぬふしきまじいぞある人もあを後よひればひきつらぬは沈むる曙明が背
 をおとす極持しつらぬ人よ伴までもその形よるびて命を惜む張とやらん
 意気北とやん花鶴の常情もあやめさうこそ今又死が死たりとも
 水泡とあつて消失する一八をよぶ為あるはばかぬ標客とまらう
 一旦の命を立てのち共死を究めぬべしお身が被ま背くおわづらまをその
 公標のち果たるおあふとや。鶴の口は被知らう竊盗に女を舊里の天降
 雁裁ぬをさく終のをも親と憑む只一個の足るものありは受け死るぞ
 階がまろくとほし形があはれじても。嗚呼とあつては本外張金の
 のほして大家近習の武士もあつても救あつて退糧し修習人となりて安渡の岸
 小海蘊焼う旦女は喜煙の細くも定めける妻おはし享年とよはれ三歳

五十四歳東六郎と叫ぶもの。窮乏の懐小入ると死に葛夫もてを助く。
 彦令の婦人とまらう。死するを外おんて去んや。且く痺の静るまで。安渡の
 岸へ伴せて介店のおん身が隨意のち共々處んとなるが糧をりちて養ふべし。
 花街より追人のいぞあるとも柳が掛る夜をんて。おや入水とらるとらる。再て
 索る人もあつ。あつてお世に後やとけん。おん身がさうりくおぞや。と問う顔とて
 覗く東六郎と面をあら。お直ぐなる隨色白く眼中映て鼻準く。猛怒するまで
 猛るは彼一八は比且バ鷲お鳥お雪お灰えま女子の水性のうらふ不易た
 糸糸小月下の公羽や締びけん。ひらめあぬ楫舟の最上の川にあつて
 ども。ワが身ひとを堰う移て。誘ふあをを誘る。さうれ今更孤とてお交
 野の鷲とち難る。おや天も明ん人もおん。さうとておさうして東六郎ら
 ワが菅笠を曙明ふらち被せて。おを引先とらうらうら新寒れま

新撰春燈音縁巻一

秋の月の都の皇岡五條の橋を渡りつ。修勢路と投て伴ひぬ。

第二段

崇とわりて寛鬼東六を魁と
別を決して曙明印籠を頒

東六郎がたぐりし小違のど東山の切やまをりて鳥の森をよる
こゝ。駿駮樓が小斯とも曙明を追番んとて此彼八方へ都しつる。そが一隊
五六人賀茂河を南へくろて東九條のあるころ。河原まで索まら柳を
切けらる衣をえて金今又お驚馬をさうりて己るん己るん彼君はなや底の
水屑とるぬ渠えよ河辺よさくゆる。柳の枝おけりし男女の衣の
紋ハ八重搦ち抱下子。原来彼君は月来るはとて強頼りのせ。一八
ぬしお伴まで牙を投らる疑ひはと一人がくバ又入らんバこそ浪打際お
脱捨る金剛の二足踏そらてありの飛弥勤の世まで索るとも環会へき

よのあじこれつくとむらり不或も梢をくら瞻仰。或ハ流るるあをよんで。
枝は難ま下猿猴とふれぬ月おおをひて。さてあふきおあふきバ入の妓院は
まをりて痺の趣を告まじ。さて水煉を催つ。死骸をびり揚る程。又六
町下流よて一八が骸を獲らり。現頃目の瀬のえぬ。曙明が亡骸ハ八條の
かえ流まひん。宇治までやぬらんを。彼此と涉獵とも終てあへきやうの
ちのけまばせんまぶらてまて己つめて一八が亡骸ハ旅宿のあが。えとりて。
鳥部山の煙をらり。日ごろへ東る親族へ報知しければ。一八が才不十と作と
ゆりの。武義の豊嶋よりたせ登りて。兄が債と僅は賤ひ。白骨を項おけて。
故郷へゆりぬ。又曙明が脱捨る往と。鷓鴣樓より。彼が舊里悲の痛
原へ遣せ。曙明が兄十兵衛といりの受納する。その返簡到来して。と。
大約この條の椿事つて。京童の癖る。或ハ落頭。或ハ曲子。おれり。と。

る月々まぐの物務あべけほど。さうしてさふ幸者。案下某生再説曙
 明ハ九死をきて一生を五五塚に救ま下。是ぞ依る神風の倅勢の倅へ倅の二
 目くひり居ろ。ワグろるるまのひく不京洛の為倅を倅々く不果一とく
 東六郎が量る不違つじやや不安堵とれど流石不氣獲けれハ舊里哉の
 蒲原の兄十兵衛神音耗へまかてて進退さす究る抱く東六が云操絶て
 浮るるとへるて正首は歎絶する思ふ感。男風流は引れつ。媒約も有くそ
 不不妻とゆと夫と齊眉とと暮一翌と且せば臆寒ん冬之夜は陝さ
 卧房のひとり横ニ枕の船底不漏さぬ水と金性ハ形不稀ある妹と倅を
 出雲で林やむまひけん不不残の縁一まろはが不娣一死とふちひりり
 さる後ハ曙明ハその年の十月より有刃てぬれば天文二年九月十七日の
 夜一ハが一周忌の産の気つれてやとらふ不分婉せハ女子にくと好入乃

随意手折一花不子のある由世不早あわれど一ハが二日の夜好と産て
 所以あべけほど。東六も曙明も初子奉一歎一不怪一とあふころゆつ不好ハ
 初生と弟とまといふ俗説ハころはかじとて後不生れると妹と定め長女を
 小草次と止以子と名つけり。掌の中の玉柿の花と愛慈む不母乳
 是る一かゝ縁が健不肥ざらにり。あそそ人の喜したと。とめて妻と娶る
 夕をめぐり子を生せと死。こまらふまんとおれのある不況で東六ハあはれも。
 美婦を獲ていと美藤女見さ一財不ゆり奉あふ久後そも憑一とてこれ
 貧し死も憂と母ぞか。やとふ東六が替剣と着ふ身不為不病一死も出来一
 不。單身かり耐よるも。わろく不世不やまき覚て親子四人が朝夕とさめぬ道で送る
 程。隙ゆく約の足搔速く春さ秋暮て小草止以子同胞ハさあ六才あを
 るりたる。生育ま不母小ゆと。その標致の愛して。儻妻がぶうもわび。翌ハ二月の

元枝よ合て東籬の月影を向かぬ如く。初元結の柳髪しほも締ぬ糸あらず。
 一夜の春雨をぬて伸んとする糸あらず。時よ九月十七日小草止か子が生に
 月あり女子のま七才ある比世に富む知の袴とさる夜の背紐をを釋
 するそ親族御黨を聚會り醜とせばあれはらち掃ゆる親がひふ
 女兒ともが誕生日の祝をせむとせけれと東去藤て用意り二見の顛
 阿漕の鯛るんと形の如く調理し。十七日の午をたて劍法の才子及近
 鄰老幼を招て終月盃を勸ふけまが衆皆醉を場し。あのが宿の
 夜りりり。びて貝の幕へく東の六のさづ燈燭を点すと小草止か子を臥屋
 入し。更よ盃盤を改て曙明のう共場居り。さるのやうな雲をるた摺前小
 言の月の新とらちまつ妹と使が盃をめぐらして更闌。まが真りり。

新撰春蝶奇縁卷之一終

